

治二十五年四月)には上位得点者が次のように発表された。参考までに記す。

西洋音楽家

三百〇七点 小説家幸田露伴令妹

二百八十八点 東京女子高等師範学校兼東京音楽学校教授

百〇四点 東京音楽学校教師

日本音楽家

九十五点 麴町區富士見町

五十八点 高嶺秀夫夫人

三十二点 改進新聞社主寺家村逸雅夫人

舞踏家

五十点 海軍々医總監高木兼寛夫人

三十七点 衆議院末松謙澄夫人

まもなく瓜生繁は家庭夫人となり、ピアノの個人教授で子弟を育てた。晩年は瓜生海軍大将夫人として多忙な生涯を送った。昭和三年十一月三日没す。

幸田延子

瓜生繁子

遠山甲子

長原梅園

高嶺専子

寺家村愛子

高木富子

末松生子

奥山朝恭(おくやまともやす) 東京府士族

履歴(要約)

安政五年(一八五八)八月六日生。

明治七年(一八七四)十二月七日海軍水兵本部より五等鼓手申し付けられる。同日砲兵隊附申し付けられる。

同八年(一八七五)三月十一日三番小隊附申し付けられる。六月五日四等鼓手申し付けられる。

同九年(一八七六)二月十五日三等鼓手申し付けられる。

同十年(一八七七)二月十四日東海鎮守府より三等水兵申し付けられ、軍

楽隊専務となる。

同十一年(一八七八)十二月二十七日樂手に任ぜられる。

同十五年(一八八二)五月二十日海軍省より本官を免ぜられる。

同十六年(一八八三)五月五日音楽取調掛に雇い上げ小使取締を申し付けられる。日給金貳拾貳錢。

同年十二月一日願いにより退職、同日寫字生を申し付けられる。「俗曲改良の仕事を担当、箏曲や長唄の採譜を行った。」

同十七年(一八八四)十一月一日再び雇となり當直員を申し付けられる。

十二月四日生徒取締に転ずる。

同十八年(一八八五)七月二十七日取調掛兼庶務掛生徒掛を命ぜられる。

同十九年(一八八六)一月二十一日、三たび雇となり宿直員を申し付けられる。

この間奥山は音楽取調掛に所属している身分を活用して、音楽教員の資格を取得するための力を養っていたようである。二十年(一八八七)

七月八日、彼は音楽科の教員免許を取得した。そして一カ月後の八月二日付で兵庫県尋常師範学校に助教諭として赴任した。したがって音楽取調掛はこの時点で退職しているようである。明治三十九年(一九〇六)

彼は教員生活をやめ、全く一新して岡山市内に西洋料理店を開き後半生を送った(『音楽教育成立への軌跡』昭和五十一年「一九七六」二〇一頁)。昭和十八年四月九日没。有名な唱歌(湊川)へ青葉しげれる櫻井の(明治三十二年六月)は彼の作曲である。

宮内省式部寮雅楽課伶人

宮内省式部寮雅楽課伶人

音楽取調掛における伶人たちの足跡は今日高く評価されている。田中康子氏が彼女の論文で「彼らは海軍々楽隊を先行者として西洋音楽の伝習を開始し、中心メンバーの多くが参画した音楽取調掛では逆に自らが先行者の役割を担った」と述べているように、伊澤修二を主軸とした音楽取調掛の事業は、彼らなくして成し得なかったといっても過言ではない。雅楽部の伶人が西洋音楽を習得はじめたのは明治七年で、明治新政府の国際化に伴い宮中での西洋音楽の需要が多くなったためであった。田中氏の論文をかりると、それまでは宮中で西洋音楽の奏楽が必要となると、軍楽隊が宮中上がったのだそうである。当時、国内で西洋